

安藤昌益と橋本律蔵

稲葉克夫

江戸時代から明治にかけて稿本『自然真営道』など安藤昌益の著述を保存した橋本律蔵についてのべてみたい。

しかし最初に断わっておくが、これから私がのべる橋本律蔵論は別に新資料の発見ということからなされるのではなく、これまで相互に関連なく分明していたものを、昌益研究の補助史料という視点から寄せ集め、昌益研究に収斂させたものである。したがって引用文なども長文にわたることを了承して頂きたい。

安藤昌益と狩野亨吉博士がともに秋田県大館市の人間であったということに運命的なものを感じたのであるが、さらに昌益の著作を百数十年も秘匿していた東京北千住の謎の人物橋本律蔵の文章をこの世でたった一人記録していたのが、大館市に隣接する鹿角市毛馬内町出身の湖南博士内藤虎次郎だったのにまたまた驚かされる。

稿本『自然真営道』が橋本律蔵の蔵書であったことは渡辺大壽の『安藤昌益と自然真営道』（木星社 昭5刊、勁草書房 昭45覆刻版刊）に詳しい。その序で渡辺は橋本について「今は故人であるが北千住の仙人と呼ばれた人で隠れた篤学者であったといわれる」とのべている。そして『自然真営道』がいかにして橋本の手に帰したかは知るよ

しもないという。

橋本の死後、その蔵書が全部和本屋浅倉屋書店にわたり、さらに『自然真営道』は内田天正堂なる人物にわたり、その後田中清造書店を経て狩野亨吉博士の手に入った。

橋本について、渡辺はその後のように発言している（ノーマンの『忘れられた思想家―安藤昌益―』に対する雑感、「思想」第318号 昭25年12月前掲覆刻版所収）。

「大著『自然真営道』や『統道真伝』を明治まで持ち伝えた江戸北千住の橋本律蔵は、この書籍が自家に蔵していることの露頭を恐れて近隣と交際せず、そのため「北千住の仙人」と綽名されていた。京都大学にいた内田銀蔵博士の縁戚であり、東京帝大の史料編纂係にいた内田天正堂の生家である北千住の肴屋の主人公にだけは、橋本律蔵が『自然真営道』の存在を内々話していたのを内田天正堂が知っていたので、橋本律蔵が死んでその蔵書全部が売物に出たと聞いて「そりゃ大変だ」と之を買った浅草の浅倉屋書店に駆けつけて之を買いとり、これに「極秘」「内外不出」などという蔵書印をわざわざ彫らせて押したことは甚だ興味をそそる。これは徳川時代以降、橋本律蔵の一門代

々が警戒しあつて秘蔵して来たことを物語る。内田天正堂が『統道真伝』を手に入れ得なかつたのは、彼は『自然真営道』の名をたびたび聞いていたので之を買い取つたが『統道真伝』という書名を知らなかつたからであらう。」(P 346)

また同じく前掲書所収の「三田学会雑誌」(第49巻第3号 昭31年3月)の「安藤昌益の身元と遺稿につきて」という論文の中の第七項に「北千住の仙人」(P 359)のタイトルで橋本を論じている。大体の内容は前掲論文と変らないが、その中で渡辺は北千住の橋本家関係をさらに整理して

(1) 橋本家は昌益関係者のアジトである。

(2) さかな屋内田氏が律蔵の学識と人格を知つて経済援助をしていた。

(3) 内田天正堂はさかな屋の息子である。さかな屋の学者息子として、また蔵書家として知られていた。しかし昌益の思想の理解は出来なかつた。

(4) 明治三十二年頃、内田天正堂は故人となつていた。

(5) 浅倉屋は橋本律蔵の沢山の蔵書を全部引受けた。その中に『統道真伝』も入つていた。狩野博士がのちに「仙人関係の一人からその名を聞いて」浅倉屋へ行つた時にはもうなかつた。しかし、大正十四年、神田東黒門町の文行堂書店が博士の所へ持つて来たと書いてある。

この北千住の橋本律蔵については狩野博士の指導のもとに東京市史编纂係の島田一郎があたり、以上の橋本関係の聞き書を得たのだがこ

れ以上は「随分足まめに調査されたが、かんじんの内田魚屋の主人も息子の天正堂も故人になつてしまつたので手がかりに乏しく律蔵の妻女の行くえも分らない」(P 361)

戦後、さらに足立区の棚網保司という人が、この橋本家をさらに追求した結果が「足立史談」(昭47・48・49)にのつてゐる。それによると内田の家は鮒与という魚屋であることは分つたが、橋本家関係は不明ということだった。以前の北千住、今の千住仲町には橋本姓はない。たゞし橋本律蔵が内田天正堂の近所だと想定すると、戦前、内田の前に「古久屋」という呉服店があつた。この古久屋が橋本を名乗つていたのを年とつた人は知つてゐる。戦前、千住仲町で橋本を名乗つていたのはこゝ一軒だった。

この古久屋は千住二丁目水野家に伝わる『千住旧考録』にも載つてゐる古い家である。また千住四丁目織畑家の幕末期作成の千住街道図をみると、古久屋は「穀屋」とあり、江戸時代には雑穀を扱つていらしい。この穀屋の姓はなく百姓甚兵衛とある。この地図ではこの家にも「律蔵」という名前はなかつたと報告している。

私は以上で橋本律蔵の調査は行き詰まりと考へていたが、このたび岡山大学法文学部教授宮崎道生博士より橋本律蔵について思いがけない貴重な教示を得、それにもとづいて多少調査を深めえたことがあつたので報告したい。

宮崎博士は、平凡社刊東洋文庫の第二七九集として内田銀蔵著『近世の日本・日本近世史』を校注編集した際、内田博士の伝記関係も調

べられた。そしてその関係資料の一つの内藤湖南博士の「内田君の家学渊源」（「芸文」十の十二・『内藤湖南全集』第六卷所収）に橋本律蔵が出てゐることを発見され、教示していただいたのである。

東洋文庫『近世の日本・日本近世史』において宮崎博士は、内田博士の父親の内田与兵衛（幼名銀蔵）は、千住で川魚問屋（屋号鮎与）の主人で、内田博士とは全く違つて頑丈な体格の持主であり、膝切り白い簡袖の着物を着て土間に立ちながら帳面に筆を走らせていたと幸田成友の追憶記「内田銀蔵博士」から紹介してゐる。

そしてさらに「このように嚴父は一介の商人のような外観であるが、実は和漢の書籍・仏典に親しみ、通じていたのであり、同じく千住在住の橋本律蔵に師事して、例えば慈雲尊者や富永仲基の著書なども愛読し、またその読書範囲は江戸時代の仏教界の新思想家、とくに日蓮宗のそれにも及んだと内藤湖南博士の「内田君の家学渊源」からのべてゐる。なお内田家は日蓮宗である。

大正八年十二月発行の「芸文」第十卷第十二号掲載の内藤湖南博士の小品は、同年七月に永眠された同僚の内田博士の伝記の編まれることを予想して、その際の資料にと思つて書かれたものである。

湖南博士はかねてから富永仲基の『出定後語』による大乘仏教論に対して、京都了蓮寺の文雄上人の『非出定』という反駁書が存在するということと、本居宣長がその反駁を『玉勝間』で高く評価してゐないことを知り、『非出定』を探してゐたところ、以前より指導助言していた了蓮寺の後住、祐光上人が帝國圖書館でこの書を発見し、二部を筆写し、その一部を湖南博士に贈られた。たまたまこの『非出定』

の末尾に橋本律蔵が奥書を書いていたのである。この本は浅倉屋から橋本律蔵の手に入り、その死後、再び浅倉屋の手で売りに出され、上野の帝國圖書館へ収まつたのだらう。橋本の全文は次の通りである。

予弱冠ヨリ此ノ書ヲ見ント欲シテ数十年間書林ニ求メ東京ハ申スニ及バズ浪華西京トモ更ニアルコトナシ。本居宣長ハ見タルヨシ玉勝間ニ出ヅルヨシ由リテ玉勝間ヲ見、又篤胤ノ出定後語ニヨリテ論ゼシ笑語ヲ見、更ニ西教寺ノ恵海上人ノ摺裂邪網篇ヲモ見テ西教寺ニハ必ズ此書有シコトヲ計リ東京ホリトメ街煙草屋山部仁兵衛ナルモノハ同寺ニ所縁アルヲ以テ託シテ問フト雖モ更ニ見ルヲ得ズ。今日始メテ浅倉氏ヨリ得テ一見ス悦ヒ之ニマスモノナシ。印ヲ見レバ西教寺ノ藏本ナル由アリ更ニ先見ノ違ハザルヲ知ル。律蔵中風ヲ病ムト雖モ今直死セズ目ヲ奇書ニ寓スルヲ得ル奇快実ニ云フベカラズ。但写誤多シ為憾耳。

仲基ハ短命ナリト見ユ。不死幾歳ナリシヤ説蔽モ今ハアルコトナシ。大意ハ翁文ニ見ユ。翁文モ先年得タリ。之レハ板本ニテ内田銀蔵モ一本写シタリ。今モ藏スベシ

橋本 律蔵

五十七才

明治十四年十一月十六日記ス

京都帝大の内田銀蔵博士は明治五年（一八七二）一目二十五日生まれたから、この橋本律蔵の文にある内田銀蔵を怪しんで内藤湖南が内田博士に質したところ、それは父の幼名だと答えている。内田博士は

長男なので銀蔵を襲名したのである。また内田博士が学者として身を立てる進路決定をしたので鮎との経営は弟に譲ったが、その弟はやはり与兵衛を襲名している。

内田博士は橋本律蔵について次のように内藤湖南に説明している。

「橋本律蔵と云へるは先代と同じく千住の人にて慈雲尊者などの著述を好まれし余り、富永が書なども読まれ、先代も之に師事してそれらの書を愛読せられし由を語られ、それより徳川時代における仏教界の新思想家に關することどもを語りかはし……」

(『内藤湖南全集』第六卷P 210)

内藤湖南は内田銀蔵の父が書写したという「翁の文」を読みたいと願って内田の了解を得ていたところ、千住が荒川の大洪水にあつて内田の生家も被害をうけ、蔵書が水びたしになって拝借の機会を逸してしまったことも書いている。もつとも内藤湖南は大正十三年にとつと大阪で発見された「翁の文」に接することができた。

内藤湖南は、内田の父の学者的雰囲気をもつて内田の学問の淵源と
いうと

「教授は打笑はれ、父は千住の鰻問屋のあるじに過ぎず、さばかりの学問したるにあらずと打消されしかども、こは教授の例の謙遜より出でし事にて徳川時代の仏教思想の中にも創見に富める富永・慈雲尊者等の書を味はれし先人は決して尋常の市人にあらざりしならん。されば教授がその絶人の卓識を史学に有せられしことも故ありけり」と書いてある(前掲書P 211)。

これまでのことから橋本律蔵については次のことがいえる。

(1) 橋本律蔵は明治十四年(一八八一)に五十七歳なら、逆算計算によつて一八二四年頃つまり文政七年頃に生まれた人物である。

安藤昌益は一七〇三年(元禄十六年)から一七六二年(宝暦十二年)の人だから、四代位の世代差がある。橋本律蔵の曾祖父あたりがもつとも接触が深かったのではなからうか。

稿本『自然真営道』の編集は八戸か江戸で行なわれたのだが、一応江戸編集説をとると、編集主任の神山仙確は宝暦五年(一七五四)四月二十五日に江戸を出立している。稿本『自然真営道』巻一序は宝暦五年(一七五五)二月となつてゐる。つまり神山仙確はこの稿本を誰かに託して江戸を去つたのであり、委託するとすれば北千住の橋本家、もしも穀物問屋であるとすれば荷物運搬も目立たず、奥州八戸との取引、人間交流も不自然ではない。そして橋本家でこのような危険な仕事を引きうけるのは仙確と同年輩の三十代の当主であらう。

『先駆安藤昌益』(昭51・徳間書店刊)で寺尾五郎氏が強調するように、昌益一門の全国集会在北千住の橋本律蔵家で行なわれたかも知れない(同書P 248)。寺尾氏は江戸開催ということには余りこだわらないが、時期は宝暦七年頃とする。もしも寺尾氏が想定するように橋本家で全国集会が行なわれたものなら、その後の橋本家が仙人化するのも当然である。

(2) 橋本律蔵は非常な説書家であつたので、和木屋浅倉書店とは昵懇の間柄であつた。また単に目を通すだけでなく、感想文を書き

つけ、注を付するほどの精読家でもあったろう。異様な執念さえ感じられる。その律蔵が死んだ直後に『自然真営道』を含めて全蔵書が売られたというのは、家人の不明からでなく、むしろ律蔵自らの意志が加わっていたと思う。引取り先が浅倉屋書店というのもそれを証明しよう。何ゆえにそのような拳に出たのかは不明だが、単なる経済事情ではなく、江戸時代から明治への大きな時代転換が、昌益一派の呪縛を解き放ったのではなからうか。

(3) 江戸時代の仏教改革に非常に関心が強いが、文雄の『非出定』への関心は異常である。何ゆえであらうか。本居宣長は、富永仲基の『出定後語』に対しては『玉勝間』で「皆かの道の経論などという書どもをひろく引出てくはしく証したる見るにめさむるこちする事共おほし」（『本居宣長全集』第一巻P244）と激賞するが、『非出定』に対しては続いて「そはたゞおのが道をたやすくいへることをにくみてひたぶるに大声を出してののしりたるのみにて一くだりだによく破りえたることは見えずむげにいふかひなき物也」とさんざんである。

『出定後語』は延享二年（一七四五）刊、『玉勝間』は寛政十一年（一七九九）刊で、平田篤胤の『出定笑語』は文化十四年（一八一七）刊で、すでに『出定後語』を手に入れることが難しく、序でその探索の苦心談が語られる。慧海潮音の『摺裂邪網編』は文政十二年（一八二九）刊である。慧海潮音は天明三年（一七八三）より天保七年（一八三六）までの真宗本派の僧である。江戸に生まれ本山の学林や江戸東叡山で学び、のち西教寺第八代住職となった。富永仲基の大乗非仏

説を攻撃した『摺裂邪網編』のほか、服部蘇門の説を駁した『金剛索』の著もあり仏教学の著述は多い（中央公論社刊・日本の名著『内藤湖南』P434）。

内藤湖南は慧海潮音について次のように語っている。

これは江戸の浅草で生まれた坊さんであります。真宗の坊さんとしてはよほど不思議な人でありまして、真宗でありながら戒律を守って肉食妻帯もしなかつた坊さんで、有名な真宗の学者であります、この人がまた『出定後語』を反駁した本を作りました。なかなかむつかしい名前の本であります。『摺裂邪網編』（一八一九刊）という、これも二巻ありまして、いろいろ反駁してあります。もちろん多少の富永の誤りをたゞすだけのことはありますが、しかし富永の根本学説に触れたようなことはありません。（前掲書P106）

また無相文雄は元禄十三年（一七〇〇）より宝暦十三年（一七六三）までの人で、安藤昌益と全く同時代の僧である。丹波国桑田郡の人で出家して浄土宗の僧となり、京都にいたが江戸に下り、太宰春台について儒学と中国語を学び、二十七歳で京都に帰りました蓮寺の住職となりました。『摩光韻鏡』（延享元年―一七四四刊）その他の著書によってわが国に伝わった漢字音と唐音（近世中国音）との間の一貫した法則を明らかにした。本居宣長の『字音仮字用格』はかれの研究成果に負うところが大きい。仏教に関する著述も多い（前掲書同頁）。

なお安藤昌益は独得の造語や読み方をして有名だが、江戸の中道等氏は八戸小笠原家の蔵書の中から「中村蔵書」の印のある確龍先生「無相沙門文雄僧谿撰」を発見して渡辺大壽氏に贈った。昌益は音韻論

に関心が深い。渡辺氏は中道氏から贈られた『韻鏡律正』について次のようにのべている。

昭和の初め中道等さんが八戸市小笠原家の雑書中から発見したとて私のところへ自身でお届け下さった「韻鏡律正」と題する表紙共十枚の筆写本があります。それには縦一寸三分横四分の長方形の「中村蔵書」という蔵書印があります。それには表紙に「確龍先生韻鏡律正」とあります。中身は有名な音韻学の大家僧文雄の著書で第一丁初めに「無相沙門文雄僧谿撰」と署名してあります（略）。音韻学について驚くべきことは、昌益は僧文雄に親しく会って文雄の草稿を写して来て教科書に使ったわけです。文雄は昌益と同時代の人で江戸の伝通院に二年ばかりいたことはありますが、もともと丹波出身で一生を京都附近で暮した人です（八戸市立図書館・『安藤昌益』P 141・昭49刊）。橋本律蔵は昌益と文雄のこのような関係を知って懸命に『非出定』を求めたのだろうか。

内藤湖南が平田篤胤の『出定笑語』を読み、富永仲基に注目したのは明治二十二年で、文雄の『非出定』に接したのは明治四十年京都帝大講師になってから数年後である。このように互いが苦勞しあったのは『非出定』が写本のみであったからだが、読んだあとに内藤湖南は「『出定後語』の研究に対してはよほどつまらない批評でありまして採るに足りませぬ」（前掲日本の名著所収「先哲の学問」P 106）と言いついて切っている。

しかし橋本律蔵は中風を病み、五十七歳にもなつてまず本の所在が自分の見当通りであつたことを快心事とし、ついで「律蔵中風ヲ病ム

ト雖モ今直死セズ 目ヲ奇書ニ寓スルヲ得ル 奇快実ニ云フベカラズ」と欣喜雀躍の喜び様である。しかも誤写の多い事を指摘する見識をもっている。誤写を発見する力はすなわち仏教に対して相当の力を持っていることであり内容にたいする批判力があることである。

ところで富永仲基の思想は、すべての思想を相対視し發展的関連の中で把えようとする歴史主義的批判精神といわれる。

彼は儒・仏・神道の三教の形骸化を批判し、加上の法則―自説の正統性を主張し、前説の上に加え上ほして思想を発表させること―を適用し、既成のいかなる思想からも絶対的權威を消滅させることから人間の、そして自らのモラルとして誠の道を唱導した（日本の思想18・『安藤昌益・富永仲基・三浦梅園・石田梅岩・二宮尊徳・海保青陵集』の水田紀久の解説による）。

内藤湖南は富永仲基を大阪の生んだ天才、第一の学者とほめる。その理由は富永の論理的研究方法の獨創性にあるという。加上の法則や歴史主義について次のように解説する。

加上の原則というものは、元なにか一つ初めがある。そうしてそれからつぎに出た人がその上のことを考える。またそのつぎに出た者がその上のことを考える。だんだん前の説がつまらないとして、後の説、自分の考えたことを良いとするために、だんだんに、上の方へと考えてゆく。（略）

つまり思想のうえから歴史の前後を発見する方法を立てた。歴史の記録のない時代のことを歴史的に考えるには、これより確かな方法がない（日本の名著『内藤湖南』P 108）。

安藤昌益が『自然真営道』で展開する儒・仏・神道批判を橋本律蔵が理解しておれば、橋本が富永仲基に親近感を持ち、あわせて富永の所説に鋭く反応した諸家の著述に大なる関心を寄せた気持の一端も分るのである。

以上みてきたように内藤湖南と橋本律蔵の間には非常に酷似した共通関心事があつた。橋本をしてあと半世紀のちの世に生まれせしむればとの思いもする。

ともあれ橋本律蔵は単に安藤昌益の稿本『自然真営道』や『統道真伝』その他を秘匿せんがために世をしのだのではなく、より積極的な姿勢で昌益思想に触れ、内容を学びとりさらに可能な線で、例えば富永仲基などの批判学説に託してむしろ通俗的に昌益思想を洩らしていたのではなからうか。こういう所に日光の真斎なる医師が天保年間に現われたり、浅田宗伯が明治初年に昌益の治療法を世に紹介することなどの原因があるのだろう。

私は昌益の自然世をある意味で国学の古道に托した橋本の心を感じる。橋本律蔵がその風貌をわれわれ昌益学徒の前にあらわす日がそんなに遠くないという気がするのである。

(追記)

絶家となつた橋本家の菩提寺慈眼寺は北千住一丁目にある。